

学校教育における教材としての絵本活用の意義と可能性

Significance and Possibility of Picture Book Utilization as a Teaching Material in School Education

鈴木 千 春* 永 田 智 子**
SUZUKI Chiharu NAGATA Tomoko

絵本はその特性を活かすことで、学校教育において教材として活用できるのではないかと考えたのもと、本稿は絵本の活用状況を学会誌掲載論文と実践事例から俯瞰し、学校教育の中で絵本がどのように活用されているのかについて論じたものである。

結果、絵本や絵本の読み聞かせに関する論文は、幼児や家庭を対象としたものが多く、教科教育に関する研究は非常に少ないことが分かった。実践事例においては、小中高の全校種で教科教育だけではなく教科外においても、多様に活用され有効であるという報告が多数なされていることが分かった。よって教科教育と関連する実践から得られた知見は、論文として発表されたものは非常に少ないのが現状であるが、学校教育において絵本が教材として活用できることへの示唆を得ることができた。

キーワード：教科教育、絵本、教材

1. はじめに

絵本について語った文献や研究には、様々な角度からの切り口がある。例えば視覚表現の研究者である今井(2002)は、絵本は「見開きを単位としたイラストレーションと文章からなり、連続する画面の展開の中でストーリーが構成される」ものであると述べている。視覚デザインから絵本を語る笹本(2001)は、「絵本は絵と言葉の表現伝達手段を、複合的に用いた複数の画面を一定の順序で連ねたメディアである」と述べている。また絵本の絵と言葉の関係において、言葉に対するイメージが無数にある時、そこに特定の絵があれば「イメージが直ちに固定され」、「理解はきわめてスムーズ」になるという。すなわち、絵と言葉をもって、何事かを伝えるための絵本は、イメージしやすい、わかりやすいメディアであることがいえる。田口(1999)は映像視聴能力のモデル化に関する研究の中で、絵本を「物語に挿し絵が組み合わされたもの」と示し、絵本の中の挿し絵は言葉や文字をイメージ化したり、さらにイメージを具体化したり、広げたりすることが目的になるものと述べている。さらに絵本は読み聞かせることで、視覚と聴覚の両方から情報伝達が可能になる(松居, 2002)ことも、絵本が持つ特性といえる。

さてこのように表現された絵本を、児童生徒は幼少期から家庭や園生活の中で親しみ、決して珍しいメディアではないことは想像するにたやすいことである。しかしそのことが絵本を幼い子どものための読みものとする考えになっているのではないだろうか。そこに疑問を持った片桐(2005)は、「生」と「死」をテーマにした絵本の分析から、絵本を使う対象者に年齢はないのではないかと結論づけている。本田(2010)もまた、青年期学生

を対象に絵本を読む行為が、読者にどのような意味をもたらすのかについての研究を行い、絵本は「子どもから大人にいたるまでの読者を対象とした絵とテキストで構成された書物であり、絵本を読むことで、その読者はそれぞれにその意味を作りあげていくもの」という立場をとっている。

これら上述の絵本の特性を活かせれば、絵本が乳幼児への活用に留まらず、児童や生徒にも活用できるのではないかと考えた。そこで、まず学校教育の中で絵本がどのような位置づけにあるのか、そこに傾向や問題はあるのかについて実態調査をする必要があると考えた。

よって、本稿では学校教育において絵本を活用した研究を概観し、教材としての絵本活用の実態と可能性について論じることを目的とした。

2. 研究方法

「絵本」と「読み聞かせ」をキーワードに、1991年～2010年の20年間分において絵本がどのように活用されているのかについて調査した。まず表1にある調査対象学会誌に掲載された論文から研究の動向を探った。次に論文検索サイトと関連書籍による実践事例を通覧し現場の実態を把握した。

3. 結果と考察

3.1 調査対象学会誌

論文のほとんどは、幼児を対象としたものや、家庭で行われる読み聞かせに関するものであった。例えば、徳渕・高橋ら(1996)は3歳児から5歳児を対象に、集団での読み聞かせの場面から子ども同士でどのような相互作用がみられるか、年齢によって違いはあるのかについ

* 兵庫県立北はりま特別支援学校

平成29年6月27日受理

** 兵庫教育大学大学院教科教育実践開発専攻生活・健康・情報系教育コース, 教育実践高度化専攻授業実践開発コース 教授

表1 調査対象学会誌

学会誌名	学会名	対象理由・備考
国語科教育	全国大学国語教育学会	国語科
日本数学教育学会誌	日本数学教育学会	算数科・数学科
理科教育学研究	日本理科教育学会	理科
社会科教育研究	日本社会科教育学会	社会科
体育学研究	日本体育学会	体育科
音楽教育学	日本音楽教育学会	音楽科
日本家庭科教育学会誌	日本家庭科教育学会	家庭科
美術教育	日本美術教育学会	図画工作科・美術科
せいかつ&そうごう	日本生活科・総合的学習教育学会	生活科 1994年創刊～2000年『せいかつか』 2001年～2010年現学会誌名
日本教科教育学会誌	日本教科教育学会	全教科を対象にしているため。
教育メディア研究	日本教育メディア学会	絵本というメディアであるため。1993年～現学会誌名 1994年～現学会名
読書科学	日本読書学会	読み聞かせに関わる研究が含まれるため。

て研究を行なった。「集団の読み聞かせ場面では、他児の発話が子どもの発話を誘発することにより、物語の理解を子ども達の間で共有し、深めることが可能である」と結論づけ、それは5歳児になってから起こるものであり、それ以前の発達段階では、相互作用は見られなかった。このことから集団年齢に応じた読み聞かせの目標設定が必要であることを報告している。

小林（2003）は、児童と母親の絵本観の比較研究として、児童が好きな絵本と母親が読ませたい絵本に着目し、両者の絵本観から絵本の意味について論じた。両者が絵本に求める共通の観点は、「おもしろさ」であったが、母親はおもしろさだけではなく、主題に愛情や思いやりを重視し、教育的意義を絵本に求める傾向があった。また、「物語と絵は同じ歩調で展開しているか」といった描画も選択の理由の一つになっていた。一方児童は、おもしろさのうち、気持ちが高揚するような冒険物語を上位に選択し、主題に勤勉や教育性のある絵本は下位となっていた。両者の間に「共通点」と“ずれ”を示唆したことは、母親の影響を受けやすい子どもの絵本経験に、よりよい読書環境をつくるうえでの重要な知見であることが分かった。

中村（1991、1992、1995）は心理学の立場から「絵本の読み聞かせに関する研究を行い、科学的な根拠に基づいて望ましい絵本の読み聞かせの因子を抽出し命名した。次にその望ましい絵本の読み聞かせと、そうでない読み聞かせが児童の物語理解にどのような影響を及ぼすのかについて実験的検討を行った。さらに、幼児の物語理解は、読み手の話題情報の与え方によっても影響を及ぼす点について分析的検討を行った。これらは保育実践者の読み聞かせに関する手法や、子どもの文章表現、または物語理解の過程を知るうえで、注目すべき研究であることが分かった。

次に、幼児と児童を対象とした研究に、徳田（1997）の障害についての理解をテーマとした絵本の読み聞かせ

に関するものがある。年中児から小学4年生の被験児にクラス担任が『さっちゃんのまほうのて』（たばた、1985）を読み聞かせ、先天的に右手の指が欠損している主人公のさっちゃんについて、指が生えてくるというハッピーエンド期待と生えてこないとする障害の永続性について、学年ごとの理解度を調査した。これによると、さっちゃんがいい子にしていれば指が生えてくると答えた子どもは年長児男子約6割、女子8割以上に上り、指は生えてこないという、障害の永続性に気付けた子どもは2年生の段階で6割以上であった。このことは、幼稚園児から2年生の頃にかけての家庭や学校における障害理解教育の重要性を示唆した。

以上が学術論文誌に掲載されている論文であるが、絵本や絵本の読み聞かせに関する研究は、幼児や家庭を対象にしているものが多いのが現状であった。今後の絵本研究の方向を示すものとはなるが、本研究の目的に迫る、教科教育における絵本活用の方法を探るものではなく、絵本の読み聞かせがもたらす効果を対象者や場面を限定して論じたものであった。

次に各教科の学会誌による結果であるが掲載編数は非常に少ないことがわかった。その中で足立（2004）は、小学校学習指導要領の「言語活動」を例に挙げ、「昔話や童話などの読み聞かせを聞くこと」に対応した、教員の読み聞かせの実践報告が多くなってきていることを述べている。このような背景から国語科や学校における読み聞かせについても、学術的な研究推進の必要があることを指摘し、読み聞かせに関する国際学術誌の調査を行った。

家庭科では「自分と家族について考える」題材の中で、愛犬の死をテーマした『ずうっとずうっと大すきだよ』（ハンス・ウィルヘルム、1988）の絵本を教材として使う提案がある（大曲・長井、2008）。「死に関する学習」を学習指導要領の家庭科の内容で示されている「家族と家庭生活」の項目に位置づけ、小中一貫5ヵ年計画学習

プログラムの5年生の学習教材に設定し絵本を活用した。

生活科では高橋ら（2000）による、幼小連携のための絵本環境を整備するための提案がある。ここでは幼稚園教育と小学校教育の全く違う指導方法を緩衝するために生活科の学習があることを踏まえ、小学校の先行体験に適した絵本の調査と抽出を行った。調査対象図書館の50000冊以上の利用可能図書から選定した絵本リストをもって、具体的な絵本環境を提示した。

以上が各教科の学会誌に見られる絵本に関する論文であるが、教科教育と密接な関係にある絵本活用の研究は少ない。さらに上記の論文もそうであるが、教科において絵本を活用するといった提案に留まっているため、それを活用した結果や教科における絵本活用の効果などは明確に示されていないことがわかった。

3.2 実践事例

3.2.1 教科教育での絵本活用事例

①国語科

小学校国語科では戦争をテーマにした教材などの授業実践（例えば吉田、2005）に、戦争児童文学の読み聞かせを取り入れた実践がある。子どもたちがイメージしにくいと思われる「戦争時代の生活」や「戦争時代における家族の絆」などに対して、考えることや想像することの手立てとして絵本が活用されている。

中学校では国語科と美術科の合科による授業の中では「21世紀に贈る創作絵本」と題して、子どもたちに語り継ぎたいメッセージを込めて絵本を制作するという実践がある（藤田1998）。その過程には、身近な絵本をさまざまな観点から分析する学習や手作り絵本の専門家に指導を受ける体験などがあつた。

遠藤（2003）は、文字のない絵本を活用して、絵に合う文章を添える学習を行った。ここでは「『映像を読む』という、情報力を育てる学習の一端を担う」総合的な言語活動の実践学習であると述べている。

石井（2005）は、たくさんの絵本に触れながら、生徒間でお薦めの絵本を紹介し合う実践について報告している。またこのような取り組みには、多くの書籍が必要であるため、学校図書館や地域の図書館との連携が不可欠であることも報告している。

玉村（1996）は障害児学級において同一の絵本教材を使用した2つの授業の比較分析を行った。発達状態を考慮して2つのグループ（授業A、授業B）に構成した分析対象の子どもたちに「ことば」の授業を設定した。すなわち各グループの学習課題や目標は異なる中で、同一絵本を教材として使用したということになる。結果、共に学習を有効にする教材として評価しているが、中でも絵本教材はねらいに合わせて柔軟に使用方法を変化させることができる点を報告している。

②算数・数学科

安藤ら（2009）は「児童数学」の文化を広める研究に絵本制作を試みた。発端は「『児童文学』の世界が重要な教育の基盤として国語教育と密接に結びついているの

に比べ『児童数学』の世界が算数教育に与える影響は弱く、文化として定着していない」という実態である。これを踏まえ、「数学という作品に触れることを楽しむ文化」の広がりを掲げ、「児童数学」絵本の開発が進められている。

竹村（2002）は中学生に数学絵本を作らせる取り組みを行ない、学習過程で生まれてくる「自己と数学の意味生成（自己変容）」について考察を行っている。絵本を制作するに当たり「絵の問題」「取り上げる数学的内容の個人差」「絵本への興味関心」「男女差」などの課題が残されたが、「自分の中の『わからなさ』や『わかりずらさ』」などの内的体験を語り直していく」姿など、自己変容はみられたという。

③理科

川崎ら（2008）の実践は、ろう学校において、「かがく絵本」の制作に取り組んだものがある。生徒たちの制作を通し、「科学的リテラシーの事象を科学的に正確に説明できる力」を育成できたことや、「理科を身近に感じられた様子」がうかがえたことなどを報告している。さらに、この実践は「聴覚障害を持つ生徒への視覚教材としても有効」であることが明らかにされている。

広木（2004）は大学院の授業において、外界への働きかけを促す展開をもった絵本づくりの実践について報告している。できあがった絵本は子どもたちに読み聞かせられた。子どもたちの絵本に対する反応は、概ね良好であり、すぐに外界への働きかけがみられたことなどを報告している。

④社会科

小学校では、絵本や写真、資料集などから得た情報を地図帳で確認しながら、各地の様子や暮らし方を探る授業がある（例えば田所、2005）。これは日本列島を学習する方法として、絵本活用も有効であることを意味している。

中学校では、歴史の教科書から民衆史が抜け落ちていると感じている平井（2006）が、当時の民衆の姿を豊かにイメージできるようにすることをねらいとし、その種の絵本を読み聞かせるなどの活用を試みた。「生徒たちは絵本によって想像力が喚起されたのか、授業での生徒の発言が大きく増えた」と述べている。

⑤音楽科

絵本や紙芝居などから得たイメージを音作りという表現活動を通して、低学年の児童が楽しく活動できる授業実践がある（例えば松永、1992）。低学年では学習の理解を補助する役割としてよく絵が用いられることに注目し、「低学年において、音をイメージさせるときに絵を媒体として用いたことは、発達段階に合っているのではないか」と松永（1992）は述べている。

⑥図画工作科

橋本（2007）は「いたずら」を題材にした絵本を小学3、4年生に活用し、道徳教育の内容である「自己を他の人と関わりの中でとらえ、望ましい人間関係を育成する」効果を絵画表現を用いて考察している。絵本を活用

することで得られた効果については『いたずら』を題材にしている身近な内容であるため、児童に自らの生活と重ね合わせて主体的に考えることを促す効果があった」と述べ、さらに「絵画表現と読み物資料とを組み合わせることにより、道徳的価値と日常生活とを結ぶ補助資料となる」ことも分かった。

⑦家庭科

田中(2010)は住環境教育の教材として、家にまつわる市販の絵本4冊を活用した授業計画を提案している。題材名は「住いと環境共生について」である。

堀内(2010)は小学生のジェンダー観を揺さぶる授業の実践報告として、絵本を活用している。学習効果としては、「各家庭における役割分担の相違についての気づきがあった」。また「自分の家族・家庭」について語る媒介物として作用し、児童の発言を促進した」として、教材としての絵本の価値を述べた。

⑧英語科

英語学習では教材として活用できる絵本のセレクトを行うための、絵本の内容分析と活用効果を論じたものや実践方法論に沿った絵本の導入や活用の提案などがある(例えば Robert J. Schalkoff, 2007)。

また、英語絵本の読み聞かせを児童に実践した報告(例えば山崎, 2009)では、英語の原書であっても児童は推測しながら読むことを楽しみ、「絵とストーリーが連動しているので理解しやすい」「物語を聞き取り、かつ、焦点化した言語形成を意味ある文脈で使うことができた」ことなどを結果として挙げている。

白須(2004)は英語教育に英語で書かれた絵本や児童文学を生徒が活用することの意義を「言語習得」「異文化理解」「文化的価値」の面から述べている。その反面、良い作品であっても文章が長いと授業では時間がかり使いにくいこと。中学では学習しない語彙が多くあり読解が難しい場合があることなどを問題点として指摘している。

⑨情報科

野部(2008)は「情報モラル絵本」の制作を高校生に実践した。ストーリーは「迷惑メール・チェーンメール」「掲示板や Web ページでの誹謗・中傷」など、情報モラルに関わる範囲から生徒が選択した。学習したことを活かして絵本を制作させたりすることは、人に伝えようとすることであり、知識の定着を図ることへとつながった。

以上が教科教育における絵本活用の実践事例であるが、校種や教科に関わらず学習に絵本が活用されていることがわかった。中でもイメージを膨らませるための学習では、導入時にその種の絵本を読み聞かせるなど補助的ではあるが活用していることや、知識の定着を図るために、まとめ時に絵本を制作させるといった活動があり、実践事例の特徴として挙げられる。

3.2.2 教科外での絵本活用事例

教科外の活用状況は学校や指導者によって様々な工夫

が見受けられ独自性がある。また教育目標やねらいに向け、複数の活動分野を合わせもって絵本を用いているため、上述した教科教育のように明確なカテゴリに分類することは難しい。しかし調査内容のわかりやすさを考慮し、メインとなる学習や活動に分類し結果を述べる。

①平和・国際理解学習

平和学習や国際理解を促す学習は、講演会や見学旅行、劇発表会などの学校行事を実施する際に事前学習に絵本を活用する傾向が特徴としてある(例えば中嶋, 2005)。児童生徒にとって生活体験が少なく、イメージしにくい学習であるため、補助的に絵本が活用されている。

②読書活動

学校教育の中で読書活動の観点から絵本が用いられている報告は、小中高の全校種において数多くなされている。例えば読書活動を習慣化させるための朝の時間や帰りの時間に読書タイムを設けたり、教員による読み聞かせを実施したりしている(例えば高森, 2010)。

③道徳的な学習

小学校を対象に「道徳実践力」を高めるために絵本を活用した学習とモラルスキルトレーニングを取り入れた学習に関連付けた研究がある(星野, 2010)。学習は絵本『だいじょうぶ だいじょうぶ』(いとう, 1995)を中心資料にして、家族に感謝の気持ちを伝えようとする心情を育んでいった。星野(2010)はトレーニングの事前に絵本を活用することで実践意欲が高まり、トレーニングの成果を有効にしたと述べている。

④個別指導

特別支援学級(特殊学級・障害児学級を含む)の児童や多動児への発達支援のための教材として絵本を介した取り組みが多数報告されている。例えば前田(1995)は、情緒学級に通う小学校1年生男児に対して、個別に絵本の読み聞かせと絵本づくりに比較的継続して取り組んだ。絵本を活用した継続的な発達支援の試みによって、男児は「場面状況とことばの理解を深めて」いくと共に、「表現された心情を細かく読みとれることも可能になった」という。また、男児の活動エネルギーが絵本づくりという創造的な活動に向けられたことで衝動性が弱まりと共に多動が減少したと報告している。

自閉症児の個別指導では、情緒性の広がりを目指して絵本の読み聞かせを導入したり(例えば鈴森ら, 2001)、発語が少なく言語の理解も難しい児童には、好きな絵本を使って文字や絵を書き写したりする取り組みなどが行われている(例えば熊谷ら, 1999)。

以上が教科外の絵本の活用報告であるが、教科の学習と学校行事に関連させ、複合的にかつ継続的に絵本と関わる取り組みが見られた。この点は教材としての絵本の可能性に迫る活用方法であることが分かった。

4. まとめ及び今後の課題

本稿では絵本を教材として活用できる可能性を見出す最初の段階として、学会誌調査と学校現場での活用事例を調査した。調査の結果まず学術論文誌からは、乳幼児

を対象にした研究や親子間の絵本観の相違など家庭における研究、また読み聞かせの手法や心理学的な分野からの研究、他国に目を向けた読み聞かせの調査研究などがあることが分かった。一方、教科教育の中での絵本活用の研究は非常に少なく、絵本を用いる提案に留まっている。またその提案に対して活用した結果や効果を明確に示していないという点も明らかになった。よって学校教育の中での絵本活用、加えて教材としての絵本活用研究は、ほとんど見当たらないのが現状である。

次に絵本を活用した実践事例を見ると、教科教育の中では、活用方法の多くが学習で得た知識の定着を図るために絵本を制作したり、調べ学習のまとめに絵本を制作したりするなど、学習の成果物として「絵本をつくる」といった活動である。さらにこの取り組みは中学生以上で行われることが多く、できた絵本の発表の場として小学生や幼稚園児を対象に読み聞かせ交流会をするといった特徴がある。また、このケースには、文字のない絵本を活用して、絵から読み取ったことを、詩や文章、言葉にして絵に添えながら独自のページをつくるといった実践も含めることができるであろう。絵本をつくる学習の過程には、絵本を手にとったり読んだり、市販の絵本に触れる体験があったであろうことはうかがえるが、主になる学習は絵本づくりである。

国語科の中ではイメージしにくい戦争を扱う単元に、想像することの手立てとしてその種の絵本を読み聞かせる実践がみられた。その他は、児童生徒が絵本をつくる活動が多かった。その傾向は算数数学科、理科、図画工作科、家庭科、情報などの教科でも見られた。社会科では国語科同様に戦争や昔の人々の暮らしなどを知る歴史学習の中で絵本を資料として活用していた。比較的新しい試みとしては、算数数学科の「児童数学」の文化を広める絵本の開発に關しての取り組みである。絵本を開発する必要性を述べている点に注目した。また、英語科では活用の前段階として、授業実践に使える絵本の内容分析が進められていることが分かった。

絵本の活用は教科によってばらつきがあり、活用が試みられていない教科や、必要性が薄いといった教科の現状も把握できた。

教科外での絵本活用の実践事例では「読み聞かせ」が多く見られた。それは読書活動の習慣化や言語活動を育むことをねらいとした長期的な取り組みの一端としての活用である。また、講演会や見学旅行など学校行事とも重なるが、事前学習の資料として用いられるケースも少なくない。その場合、教科教育と学校行事を関連させ、複合的にかつ継続的に絵本と関わる取り組みにおいて、有効に作用したという報告がある。このように絵本活用が学校行事のそれ自体の主ではないが、その目的を達成させるための一手段として関わっていることがわかった。

その他、絵本が教材として使える場面には、個別指導ではあったが、多動児や自閉症児を対象にその効果が報告されている。これらはクラスにおいて特別な支援を必要とする児童や生徒への学習支援が望めるものとして注

目できる。

このように学術論文、教科教育、教科外から学校教育の中での絵本の活用状況を俯瞰すると、小学校、中学校、高等学校全体を通し、絵本の「読み聞かせ」や「絵本づくり」など多様に活用されていることが分かった。これらの学校現場の様子から児童や生徒にとって、学校の中で絵本を使用することは、特別な違和感は少なく、親しみが持てるメディアであるのではないかと考える。

また、教科教育の中では比較的絵本をつくる活動が多く、制作するための参考資料に絵本を教材として活用しているケースが見受けられた。逆に教科外では、絵本を読み聞かせに活用する傾向がある。中でも読み聞かせの活用で注目したいのが、イメージしにくいであろう題材に補助的資料として導入に用いられる点である。その効果も実践レベルではあるが有効である報告が多かった。教科教育の中には、学習に臨むにあたり、児童や生徒が日常の中にイメージしにくい事柄がある。例えば上述の調査では、戦争を含む歴史学習などがそれに相当し、絵本が教科教育において教材として活用できることを示唆するものである。

しかし一方で、学校教育の中での絵本活用が実践レベルでの報告に留まっており、実践から得られた知見を、研究として論文にまとめられたものが少ないことも、実態として明らかになった。

学校教育の中で絵本を活用した取り組みは、日々の研修や授業研究により、まだまだ行われているであろうと推察できる。よって、学校現場での絵本活用の一端を述べることはできたが、研究の成果には一定の限界があり課題が残る。しかしこれら絵本が何らかの理解を促す教材として活用されていることに着目することはできた。今後は学習者と教科の課題との間で、どのような絵本の介在が必要であるかについて検証することが課題である。

引用・参考文献

- 足立幸子 (2004). 国際学術誌における読み聞かせ研究レビュー. 国語科教育55. 全国大学国語教育学会. 52-59
- 安藤三央・松井美沙枝 (2010). 数学の世界を印象的に子供の内に届ける絵本の開発—そのⅡ創作絵本とその具体に触れた子供の反応—. 日本数学教育学会誌. 臨時増刊総会特集号92. 34
- 遠藤瑛子 (2003). 『人を育てることばの力 国語科総合単元学習』. 溪水社
- 藤田まり (1998). 21世紀に贈る創作絵本—国語と美術の合科型自由学習の試み—. 『月刊国語教育研究』320. 38-39.
- ハンス・ウィルヘルム. 久山太市 (訳) (1988). 『ずーっとずっとだいすきだよ』. 評論社.
- 橋本忠和 (2007). 道徳教育における絵画表現の意義についての一考察—絵本「ゆきちゃん物語」を使った実践を通して—. 美術教育学. 美術科教育学会誌(28). 307-320.

- 平井美津子 (2006). 実践記録 中学校 絵本を使って惣村を学ぶ (和泉国日根野荘) (特集 物語・絵本を授業へ). 『歴史地理教育』(698). 24-29.
- 広木正紀 (2004). 大学院の授業で絵本をつくるー「子ども達の外界へのはたらきかけをどう促すか」を考える手がかりとしてー. 日本理科教育学会全国大会要項(54). 192.
- 本田幸 (2010). 絵本『ペツェッティーノ』と読者間における自己認識についての考察ー青年期学生を対象としてー. 読書科学53 (1・2) 合併号. 日本読書学会. 13-22.
- 堀内かおる (2010). 小学生のジェンダー観を揺さぶる絵本教材の可能性ー家族の仕事と役割をめぐるー. 日本家庭科教育学会2010年度例会 研究発表 パネルディスカッション 要旨集
- 星野裕樹 (2010). 道徳的実践力を高めるための授業展開ー絵本とモラルスキルトレーニングを活用した学習指導の有効性ー. 教育実践研究20. 199-204.
- 今井良朗 (2002). 絵本とアニメーション. 今井良朗・中川素子・他14名 (2002). 『イラストレーション／絵本』. 武蔵野美術大学出版局. 42-43.
- 石井裕子 (2005). お薦めの本の紹介で読書意欲を育てるー「おはなし 大すき」ー. 『実践国語研究 6・7』 267. 29-32.
- いとうひろし (1995). 『だいじょうぶ だいじょうぶ』. 講談社.
- 片桐史恵 (2005) 絵本から学ぶ生と死. 中部学院大学研究紀要. 111-119.
- 川崎耕介・伊佐公男・石井恭子 (2008). 事象を科学的に説明する力の育成ーかがく絵本の作成よりー. 日本理科教育学会全国大会要項 (58). 181.
- 小林斗志子 (2003). 小学校児童と母親の絵本観の比較研究. 読書科学47 (4). 日本読書学会. 128-137
- 熊谷由美子・紙谷恒・古川宇一 (1999). 特殊学級における自閉症児Aちゃんとの文字学習. 情緒障害教育研究紀要18. 127-132.
- 前田信幸 (1995). 多動児Y君への絵本を介した発達支援の試み. 情緒障害教育研究紀要14. 109-114.
- 松居直 (2002). 『本のよろこび』. NHK 出版.
- 松永洋介 (1992). 低学年における視覚的イメージを媒介とした創造的音楽学習ー絵本や紙芝居を用いた音づくりの実践を通してー. 大阪教育大学紀要V. 教科教育41(1). 145-156.
- 野部緑 (2008). 高等学校における「情報モラル絵本」作成の実践. 情報処理学会研究報告. コンピューターと教育研究会報告 (42). 73-78.
- 中村年江 (1992). 絵本の読み聞かせに関する心理学的研究 (Ⅱ)ー絵本の読み聞かせが幼児の物語理解に及ぼす影響ー. 読書科学36 (3). 日本読書学会. 81-88.
- 中村年江 (1991). 絵本の読み聞かせに関する心理学的研究ー絵本の読み聞かせに関する変数と望ましい読み聞かせ条件の検討ー. 読書科学35 (4). 日本読書学会. 149-159
- 中村年江 (1995). 絵本の読み聞かせに関する心理学的研究 (Ⅲ) : 幼児の物語理解に及ぼす話題情報の影響. 読書科学39 (1) 日本読書学会. 16-23.
- 中嶋千絵 (2005). 実践 小学校アニメ『対馬丸』で平和を学ぶ. ー特集 子どもと学びたいアジア太平洋戦争ー (第一部 絵本・アニメ・映画で学ぶ戦争と平和). 『歴史地理教育』(687). 28-33.
- 大曲美佐子・長井ゆかり (2008). 自分と家族について考える「死に関する授業」の構築ー家庭教育における小中一貫5ヵ年計画学習プログラムー. 日本教科教育学会誌31 (2). 10-17.
- Robert J.Schalkoff (2007). 小学校における英語活動においての歌や絵本の導入・活用についてー実践方法論に沿った事例の提案ー. 山口県立大学国際文化學部紀要13. a71-a76.
- 笹本純 (2001). 絵本の方法ー絵本表現の仕組み. 中川素子・今井良朗・笹本純. 『絵本の視覚表現ーそのひろがりとはたらきー』. 日本エディターズスクール出版部. 108.
- 白須康子 (2004). 中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用. 人文研究神奈川大学人文学会誌154. A83-A111.
- 鈴木玲子・岡信恵・斉藤めぐみ・大西将隆・加藤亜湖・長和彦・古川宇一 (2001). A君の社会生活スキルの獲得と情緒性の広がりを目指してー買い物学習・靴ひも結び・絵本の読み聞かせー. 情緒障害教育研究紀要20. 193-200.
- たばたせいいち (1985). 『さっちゃんのまほうのて』. 偕成社.
- 田所恭介 (2005). 実践記録 小学校四・五・六年 地図を広げ、絵本・写真・資料でくらしを探る (特集 楽しく地図を学ぶ). 『歴史地理教育』(689). 14-19.
- 田口真奈 (1999). 映像視聴能力のモデル化に関する実証的研究. 大阪大学大学院博士学位論文. 36-41.
- 高橋敏之・鎌野智里 (2000). 小学校生活科学学習の先行体験に適する「自分の成長」を主題にした絵本ー生活教科教科書との視覚的共通性の視点からー. 日本教科教育学会誌23 (1). 39-48.
- 高森隆子 (2010). 「本はともだち」ー読み聞かせから広がる世界 (第四学年) ー. 吉川芳則・大江平治 (2010). 『思考力、表現力を育てる文字の授業: 「読むこと」の言語活動開発に向けて』. 三省堂. 204-209.
- 竹村景生 (2002). 数学絵本づくりに取り組んでー数学教育における物語性の探究Vー. 日本数学教育学会誌. 臨時増刊総会特集号84. 322
- 田中宏実 (2010). 高等学校における絵本を用いた住環境教育に関する考察ー生徒による絵本の意味の読み取りと学習効果についてー (住教育(2), 建築社会システム). 学術講演梗概集. 都市計画・建築経済・住宅問題2010. 1435-1436
- 徳淵美紀・高橋登 (1996). 集団での絵本の読み聞かせ

場面における子ども達の相互作用について．読書科学
40 (2)．日本読書学会．41-49.

徳田克己 (1997)．障害理解における絵本『さっちゃん
のまほうのて』の読み聞かせの効果 (Ⅱ)－ハッピー
エンドに対する期待と障害の永続性に関する認識の発
達的变化－．読書科学41 (1)．日本読書学会．9-14.

山崎友子 (2009)．小学校高学年での英語活動の指導の
ために－フォーカス・オン・フォームの英語指導理念
を取り入れた英語絵本の読み聞かせ．『教育展望』55
(3)．44-49.

吉田浩一 (2005)．読書活動で戦争児童文学の読みを深
める－「ちいちゃんのかげおくり」－．『実践国語研
究 6・7』267．41-44.